

第3期第2回詳報

吊いの現実 伝え継ぐ

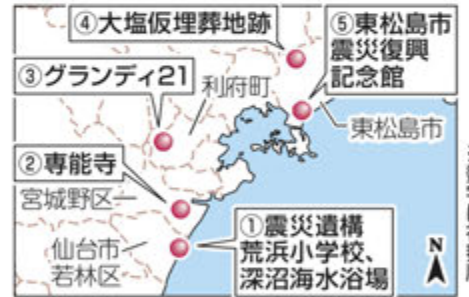
被災地視察 思い新たに

311
次世代塾
 伝える／備える

東日本大震災の伝承と防災の担い手育成を目的に、河北新報社などが開く通年講座「311『伝える／備える』次世代塾」第3期第

2回講座は18日、仙台、東松島両市などを訪れ、多数の遺体と向き合った吊いの現場で学びを深めた。受講生約80人からは「人の死をタブー視せず、備えておくことが必要だ」「被災地に学び震災の事実を伝え継ぐ」といった声が上がった。

視察は仙台市若林区の震災遺構・荒浜小、津波がれきが押し寄せた宮城野区の



※数字は視察順

専能寺を巡り、遺体安置所となった宮城県総合運動公園(グランディ21、利府町)、東松島市大塩の仮埋葬地跡、同市野蒜を訪れた。

視察後、仙台市宮城野区の東北福祉大仙台駅東口キヤンパスで10班に分かれグループ討議。グランディ21で葬送に尽力した仙台市の葬祭業「清月記」の西村恒吉業務部長(46)や専能寺の足利一之住職(52)らの講話を基に意見交換した。

受講生からは「被災の現場に立つことで学べることに

がある。意識を高く持った」「平時からつながっておくことが大切だと学んだ」と、防災啓発の重要性を強調する声が上がった。

また「若い世代が中心となり震災の事実を拾い集め、多くの人に伝えていく義務がある」と、震災伝承活動に前向きな意見があったほか、「津波の犠牲者というくりだけでは、数字上の事実として見落とすことも多い。被災者一人一人に向き合う心構えを持ちたい」という声もあった。

受講生の声

担当の東北福祉大インターン生は次の通り(敬称略)。3年橋本瑚都(こも)▽2年木村杏奈、武藤有沙

現地訪ね被害体感

仮埋葬について話を聞き、実際に現場に行った際、震災は本当に想定を超える災害だったと実感しました。

感じました。犠牲者2万人の一人一人に人生があり、その生に向き合うことが吊いにつながると思います。(仙台市青葉区・宮城教育大2年・仲美祐さん・19歳)

高い職業意識実感

仮埋葬は凄惨な状況で葬儀のプロにも衝撃的な出来事でした。任務を全うした講師の話に高い職業意識を

が目に焼き付きました。震災報道は減っていますが、震災のダメージが残っていることを伝えたい。(大阪府吹田市・関西大3年・比屋根慶子さん・21歳)

ダメージ今もなお

沖縄県出身、関西在住で震災の知識はほとんどなく、遺体の仮埋葬や犠牲者の吊いなど当事者が語る光景



東松島市野蒜の慰霊碑前で市職員の説明を聞く受講生
 18日



震災遺構・荒浜小近くで、津波に地面が削られた民家跡を見学する受講生ら



視察後のグループ討議後、班ごとのまとめを報告する受講生



次世代塾推進協議会」の構成団体は次の通り。河北新報社、東北福祉大、仙台市、東北大、宮城教育大、東北学院大、東北工業大、宮城学院女子大、尚絅学院大、仙台白百合女子大、宮城大、学都仙台コンソーシアム、日本損害保険協会、みちのく創生支援機構。事務局は河北新報社防災・教育室＝メールjisedai@po.kahoku.co.jp